移民
－東アジア人の場合－

施　映汝

はじめに

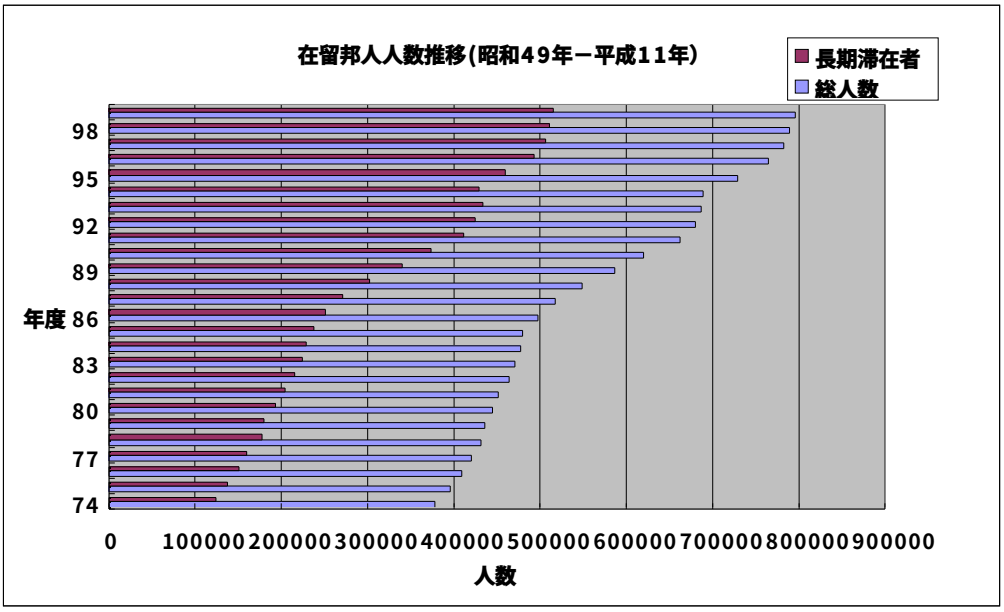
私は台湾に生まれて、家の近くの幼稚園に二年間、小学校に六年間通って、中学校二年間隣の県の私立カスッリク寄宿学校で勉強していた。そして、中学校三年生のとき家族とニュージーランドに移民した。ニュージーランドの高校、大学を卒業して、そして今年の一月に文部省の日本語・日本文化の研修生として広島大学に来ました。こうして私は世界中のいろいろな国の人々と接して、新しい環境に対しての適応性もかなり身につけた。しかし、始めてニュージーランドに行った時、学校を適応すること、新しい言葉で話すこと、自分のアイデンテイテイ－を確かめることなど対面しなければならなかった。そのポログレースのなかで、新鮮さがいっぱいだったが、時々寂しさ、時々辛さ、私が感じていた。移民というのは、今でも昔でもプラス面とマイナス面がある。何かを失うとき何かを得るというわけだと思う。しかし、昔の移民たちと比べたら、自分がどんなに幸せだろうと『華人の歴史』を読んでいたとき痛感した。

１．私が見た現代移民たち－ニュージーランドの場合

台湾人と香港人がニュージーランドへ移民するのは８０年代後半から１９９６年ぐらいまで大ブームになった。その理由の一つは言うまでもなく、１９９７年にイギリスが香港を中国に帰還することだと考えられる。しかし、単なる親たちが子供たちにもっと自由の教育環境で勉強させたい、もっといい環境で成長させたい、という気持ちで移民した人もいた。もちろんニュージーランドの移民政策の変革も主な理由だと思う。８０年代の半ばから商業移民の開放と９２年からの技術移民である。その時期の移民は大体社会の中産階級の４０代であり、つまり会社の管理職、医者、エンジニア、会社の経営者たちが多い。しかし、こういう人たちは実際ニュージーランドで再就職せず、半定年という形で、故国での仕事とニュージーランドにいる家族のあいだ行ったり来たりしている人が多い。こういう父たちは「空中飛人」と言い、つまり一年中父たちは仕事のためや家族のため何度も故国とニュージーランドのあいだを飛んでいるからだ。一方、永住権を取得しても、子供だけニュージーランドを留学し、しばらく親戚やホームステイの家で暮らしている場合も多い。どっちかと言うと、親たちが子供のために犠牲している場合が多い。

韓国もほぼ同じ時期に、多くの人々がニュージーランドに移住した。今オークランドのショッピング街では韓国人のデーリーショップや洋服ファッションショップがいっぱいある。しかし、この東アジアの移民ブームのなかに、日本からの移民はわずかの人数しかない。ニュージーランドにいる長期滞在の日本人はほとんど留学や仕事の関係である。あるいは、ニュージーランド人と結婚した人である。台湾や香港などのような商業移民や技術移民の形で移住してきた日本人はほとんどいない。

２．グラフから見た日本海外移住のトレンド



注：総人数＝永住者＋長期滞在者

２ページのグラフは外務省出版の「海外在留邦人数統計」昭和４１年から平成１１年までのデーターによって作られた。在留国から永住資格を得ている者、つまり在留国で骨を埋めるつもりで生活の本拠を日本からその国へ移住した人々は「永住者」とし、その以外の者、つまり在留国での生活は一時的なものでいずれ日本に戻るつもりの人々は「長期滞在者」として区別している。このグラフを見ると、１９７４年から１９９８年にかけての海外に在住する日本人長期滞在者が増えるにつれ、総人数が増える一方であるが、永住者の人数はほぼ変わっていない。こう考えると、留学や仕事の関係でしばらく外国で滞在する日本人が増えているが、実際移民の手続きや面接などのプログレスを通して海外に移住する人が少ない。

３．移民とは何か

移民というのは「お金をもうけて故郷に錦を飾る。そのつもりで海を渡ったところが、

さまざまな事情で帰れなくなった。やむをえず現地にとどまって、そのまま居着いてしまった人たちなのだ」、あるいは「日本の過去のある時代において、人口過剰に悩む日本政府によって、追い出され、切り捨てられた人たちである」と『海外移住の意義を求めて－日本人に海外移住に関するシンポジウム』という本に書いてある。『華人の歴史』にも似たような事を述べている。日本人であろうか、中国人であろうか、昔の人々に対して移民のイメージは変わらないそうだ。

このような理由で移民することを決めたのは現代移民のなかにはまずあるまい。なぜかというと、東アジアの日本や台湾や香港などでお金を儲けることはいまのところどこよりもできるからだ。定年後、のんびりした生活を送るために移民した人も少なくない。それに、航空交通の便利さで、移民ができた人ならある程度のお金を持っているから、いつでも故国に帰れることになった。政府によって追い出されることはおろか、国の人材や資産の流失を惜しんでいるの方が正しいかもしれない。

４．海外移住の歴史の要因－日本の場合

では、日本の移民ブームはいつ起こったか、どんな状況で起こったか検討していきたい。７ページの図１を見ると、歴史のイベントや政府の政策によって、移民の人数がけっこうアップ・エンド・ダウンがあることが分かる。大体、日本移民の要因は五つあると考えられている。第一に、海に囲まれた島国にいる日本人は海外志向性があること。移民県といわゆる瀬戸内海に面している広島、山口、それに四囲を海に囲まれた沖縄は昔から移民人数が多かった現象から証明されている。第二に、失業などを伴った人口過剰問題。明治維新後倍増した人口で、いろいろな社会問題となったがゆえ、海外に移民することを取り上げられた。第三に、農村の経済不景気と凶作。第四に、政府の積極的な移民政策と移民会社の出現。第五に、優れた移民啓蒙家や指導者の出現や成功した先輩移民の刺激。

５．契約移民

１９世紀の中国人移民はほとんど契約労働者の形であった。つまり「クーリー」とも言い、契約を終えるまで働けなければならなかった。しかし、こうしていい条件の広告を見て、誘拐された人が多かった。移民先（主にキューバ、オーストラリア、ペルー、カリブ海の砂糖農園）に着いてからというもの、死ぬまで奴隷のように働かせられた日々だった。

一方、ブラジルで最初の日本移民は大体労働者としてブラジルのコーヒー農場の下に雇われて行った契約移民である。もちろんその後はほかの形で行った人もいたが、恐らくブラジルにおける日本人の８０パーセント以上が契約移民としてブラジルに移住したと考えられている。お金を儲けたら、日本に戻るつもりでブラジルに渡った契約移民はブラジルが夢の叶われないところと感じ、多くの人が契約を無視して、命がけで逃げようとした。

６．差別問題

アメリカでは、１９世紀末の革新主義の思想状況にも適合したこと、中国人移民の排斥、入国禁止があった。そして、日露戦争後、日本を脅威と感じたアメリカには「黄禍論」と「日本人移民の排斥」があった。ほぼ同じ時期、オーストラリアの白豪主義（White Australian Policy）は１９０１年オーストラリア連邦成立とともに「白人だけの理想郷」として確立された移民法である。その目的は有色人種の排斥と入国規制であった。人種の差別問題は移民に対して重要な問題だった。

私は移民として学校や社会での人種に関する差別を受けたことがなかった。ニュージーランドでは昔からオーストラリアと違って、人種差別問題が少なかったからだと思う。ところが、３年ぐらい前、ニュージーランド・ファーストという党のリーター、ピータースは、アジア人移民の増加の現象に関して「こういう状況が続いたら、いつかニュージーランドがアジア人の国になる恐れがある」というように指摘し、国会でアジア移民を禁止されることを提案した。しかし、大多数の人が彼の提案を「レーシスト」と批判し、反対した。今の移民政策は前よりちょっと厳しくなったが、アジア移民はまだまだニュージーランド政府にとって経済的に有力なグループである。

７．アイデンテイテイーの変化

どこの移民でもいつの時代の移民でも同じく、海外に移民してアイデンテイテイーの変化を対面しなければならない。近代移民の一世は母国語を話せるし、母国での生活もある程度送っていたから、母国に対する思い出を持っている。一方、二世になると、ほとんどの場合母国語を失ったし、考えや行動は西洋化になったし、いわゆる「バナナ」（外は黄色で、中身は白であること）になってしまった。しかし、現代移民は違うと私が思う。２１世紀に向かっている９０年代の新移民たちは、ただ黙って一生懸命西洋人みたいになろうではなく、移民先での人とお互いに自分の文化を教えてあげ、自分が物に対する価値観を伝わなければならない。

私は高校の時、同じ学年に移民してきたアジア人は私しかいなかった。ほかに留学しにきたアジア人がいたが、なぜか私がいつも線を引いて「私と彼らは違うよ！」と強調して、一生懸命「キーウィー」になろうとした。しかし、こうすればするほど自分が一体何人かとよく分からなくなった。

ところが、大学に入って、いろいろな人と出会って、キーウィー、二世中国人、新移民、ほかの国からの留学生たちと友達になった。知らずにいつの間にか、自分の新しいアイデンティティーを見つけた。

８．私のもう一つの故郷－「Home Away From Home」

広島大学合唱団で「故郷」を歌っていた。指揮者が「自分の故郷に対する思いを込めて歌わなければ、この曲の美しさが伝えられない。」と言った。そのとき、頭の中に、二つの風景が浮き上がっていた。今の私にとって台湾の南投もニュージーランドのタオランガも私の“ホームタウン”である。どっちに帰ってもほっとできる、親しく感じるからだ。

《参考文献》

『海外移住の意義を求めて－日本人に海外移住に関するシンポジウム』外務省・国際協力事業団、１９７９

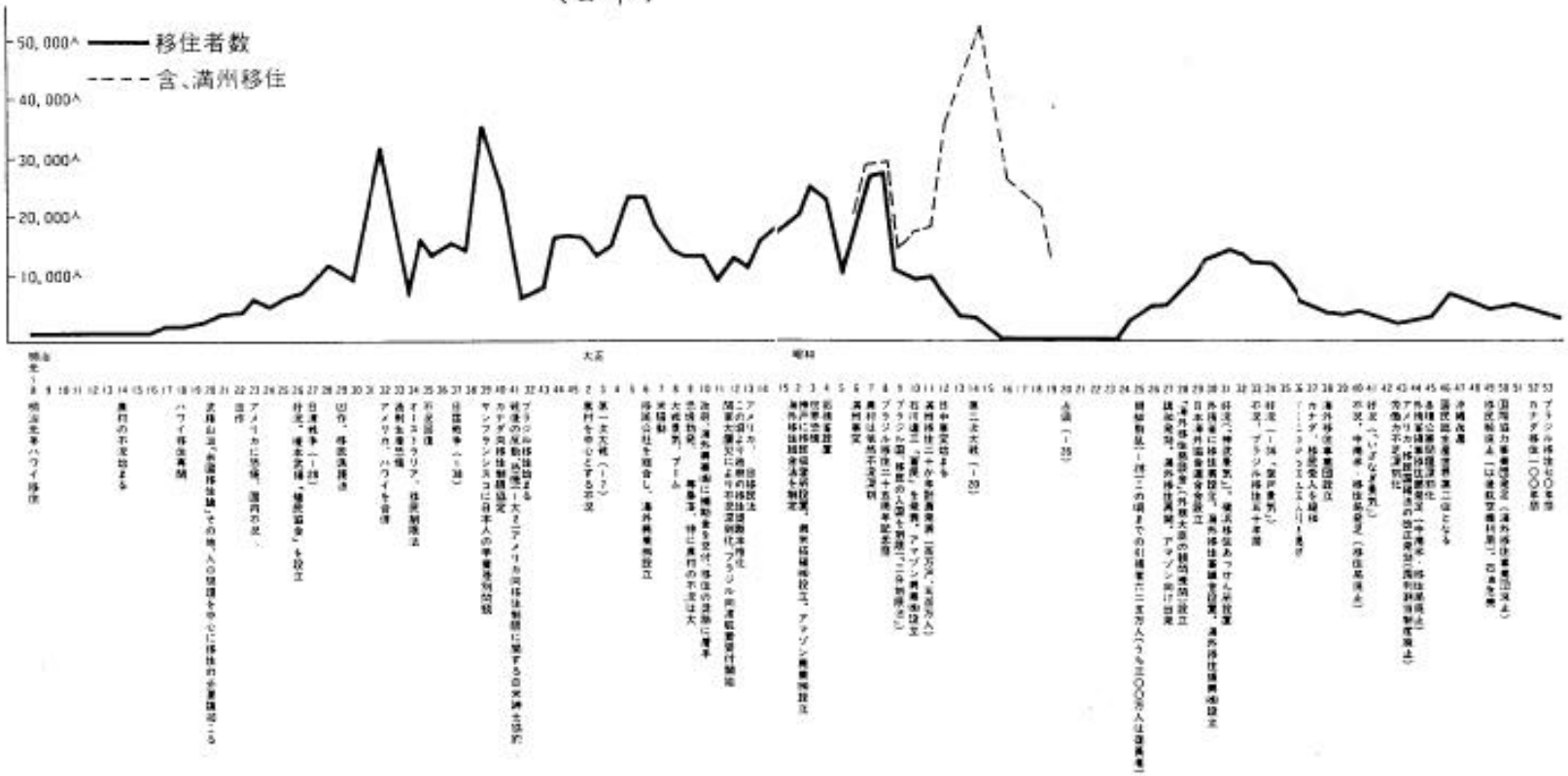
移民研究会『日本の移民研究』、紀伊国書店、１９９４

リン・パン『華人の歴史』、みすず書房、１９９５

『海外在留邦人数統計』、外務省、昭和４１～平成１１年

図 1. わが国海外 移住の消長

（日本）



日本移民の時代区分

第1期	第2期	第3期	第4期	第5期	第6期	第7期	第8期
ハワイ・北米無制限移民前期	ハワイ・北米無制限移民後期	ハワイ・北米制限・南米移民前期	南米移民中期，南方移民前期	南米移民後期，南方移民後期	中絶期	南米移民再興期	南米移民停滞期

i